埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第417集

比 企 郡 小 川 町

宮 前 遺 跡

都市計画道路環状１号線／社会資本整備総合交付金（街路）工事関係
埋蔵文化財発掘調査報告

２０１５

埼　玉　県

公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では、「安心・成長・自立自尊の埼玉へ」を５か年計画に掲げ、県民が安心して暮らせる地域づくりを目指しています。そのなかで、交通網の整備は、県民の利便性の向上、産業の活性化を図るために欠くことのできないもので、地域の生活を支える身近な道路の整備もその一環として進められています。小川町では、都市計画道路環状１号線が、町の中心を迂回する環状道路として、市街地の渋滞緩和を目的として計画されました。

小川町は、奥武蔵の山あいにある自然と歴史の豊かな町です。最近では、「細川紙」の手漉き和紙技術が、ユネスコ無形文化遺産に登録され、かけがえのない歴史と伝統を残す地として改めて脚光を浴びています。また、国指定重要文化財吉田家住宅や国指定史跡の下里・青山板碑製作遺跡など、文化財や史跡も数多く知られています。

そして、都市計画道路環状１号線建設予定地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地がいくつか存在し、今回発掘調査を実施した宮前遺跡もその一つです。発掘調査は、同事業に伴う事前調査であり、埼玉県の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、奈良時代の竪穴住居跡や土壙など、古代の生活跡が発見されました。住居跡からは須恵器や土師器などが数多く出土し、当時の人々の暮らしぶりが明らかになりました。

本書はこれらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県東松山県土整備事務所、小川町教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成27年３月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　樋　田　明　男

例　言

1．本書は小川町に所在する宮前遺跡第１次調査の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は以下の通りである。

宮前遺跡（No.35 － 133）

比企郡小川町青山字田中 1067 外

平成 26 年７月 23 日付け教生文第２－ 29 号

3．発掘調査は、社会資本整備総合交付金（街路）工事事業に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成 26 年度）

「社会資本整備総合交付金（街路）工事（青山工区・宮前遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託）」

整理報告書作成事業（平成 26 年度）

「社会資本整備総合交付金（街路）工事（青山工区・宮前遺跡埋蔵文化財発掘調査（整理）業務委託）」

5．発掘調査・整理報告書作成事業は、Ⅰ－３に示した組織により実施した。

発掘調査は、平成 26 年８月１日から平成 26 年９月 30 日まで実施し、岩瀬譲・砂生智江が担当した。

整理報告書作成事業は、平成 27 年１月５日から平成 27 年２月 27 日まで実施し、青木弘が担当した。

報告書は、平成 27 年３月 23 日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 417 集として刊行した。

6．発掘調査における基準点測量は、株式会社未央測地設計に委託した。

7．発掘調査における空中写真は中央航業株式会社に委託した。

8．発掘調査における写真撮影は岩瀬・砂生が行い、出土遺物の写真撮影は青木が行った。

9．出土品の整理･図版作成は青木が行い、岩瀬、田中広明、大屋道則、福田聖、砂生の協力を得た。

10．本書の執筆は、Ⅰ－１を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、その他を青木が行った。

11．本書の編集は青木が行った。

12．本書にかかる諸資料は、平成 27 年４月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

13．発掘調査や本書の作成にあたり、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、小川町教育委員会、および下記の方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。

高橋好信　吉田義和　島田喜夫

凡　例

1．遺跡全体におけるＸ・Ｙの数値は、世界測地系国家標準平面直角座標第Ⅸ系（原点北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を指す。

　Ｃ３グリッド北西杭の座標値は、Ｘ＝5670.000ｍ・Ｙ＝－52570.000ｍ、北緯36°02′58″・東経139°14′59″である。

2．調査に際して使用したグリッドは、国家標準平面直角座標に基づく10×10ｍの範囲を基本（１グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を設定した。

3．グリッドの名称は北西隅を基点に、北から南にＡ～Ｆ、西から東に１～５、とし、表記は両者を組み合わせてＡ１グリッド等と呼称した。

4．本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

ＳＪ…竪穴住居跡　ＳＫ…土壙

Ｐ…ピット・柱穴

5．本書における挿図は、一部の例外を除き以下の縮尺を原則とした。

全体図　1/300

遺構図　1/60・1/30

縄文土器　1/4　土器拓影図　1/4

土師器・須恵器　1/4

土製品・石製品　1/3

鉄製品　1/2

古銭　3/4

6．遺物実測図の表記方法は、以下の通りである。断面黒塗りしたものは須恵器を示す。また、内面黒色処理の土器は、その範囲に網30％をかけた。

7．遺構断面図に表記した水準値は、すべて海抜標高（単位ｍ）を表す。

8．遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・遺物の種別は、縄文土器、土師器、須恵器、ロクロ土師器、かわらけ、瓦質陶器、鉄製品、土製品に分別した。

・遺物計測値は法量をcm、重さをｇ単位とした。

・土器計測値の（　）は、復元推定値を示した。

・胎土に含まれる鉱物等は次の記号で示した。

Ａ：雲母　Ｂ：片岩　Ｃ：角閃石　Ｄ：長石

Ｅ：石英　Ｆ：軽石　Ｇ：砂粒子　Ｈ：赤色粒子　Ｉ：白色粒子　Ｊ：針状物質　Ｋ：黒色粒子　Ｌ：その他　Ｍ：チャート

・焼成は良好・普通・不良の３段階に分けた。

・残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を％で示した。

・備考には出土位置、註記No.、煤の付着、生産窯、年代等を記した。

9．本書に掲載した地形図類は国土地理院発行の1/25000、１/50000地形図、小川町発行の１/2500都市計画図を編集のうえ使用した。

10．文中の引用文献等は（著者 発行年）の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に掲載した。

目　次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1．発掘調査に至る経過 ……1
　2．発掘調査・報告書作成の経過……2
　3．発掘調査・報告書作成の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と環境……3
　1．地理的環境 ……3
　2．歴史的環境 ……4
Ⅲ　遺跡の概要 ……7
Ⅳ　遺構と遺物 ……11
　1．竪穴住居跡 ……11
　2．土壙…… 19
　3．ピット ……24
　4．グリッド出土の遺物 ……24
Ⅴ　調査のまとめ ……25

写真図版

挿図目次

第1図　埼玉県の地形……3
第2図　周辺の遺跡……5
第3図　調査地点位置図……8
第4図　基本土層……9
第5図　宮前遺跡全体図……10
第6図　第1号住居跡（1）……12
第7図　第1号住居跡（2）・カマド袖石……13
第8図　第1号住居跡出土遺物（1）……14
第9図　第1号住居跡出土遺物（2）……15
第10図　第2号住居跡……16
第11図　第2号住居跡出土遺物……17
第12図　土壙（1）……20
第13図　土壙（2）……21
第14図　土壙出土遺物……23
第15図　グリッド出土遺物……24

表目次

第1表　周辺の遺跡一覧表 ……5
第2表　第1号住居跡出土遺物観察表……15・16
第3表　第1号住居跡カマド石材観察表……16
第4表　第2号住居跡出土遺物観察表……18
第5表　土壙一覧表 ……22
第6表　土壙出土遺物観察表 ……23
第7表　ピット一覧表 ……24
第8表　グリッド出土遺物観察表 ……24

写真図版目次

図版１　１　宮前遺跡遠景（南から）
　　２　宮前遺跡空中写真
図版２　１　調査区全景（北西から）
　　２　調査区南端（南東から）
図版３　１　第１号住居跡（南から）
　　２　第１号住居跡カマド（南から）
　　３　第１号住居跡遺物出土状況（１）（南から）
　　４　第１号住居跡遺物出土状況（２）（南から）
　　５　第１号住居跡貯蔵穴（南から）
図版４　１　第１・２号住居跡遺物出土状況（南東から）
　　２　第２号住居跡遺物出土状況（北東から）
図版５　１　第１号土壙（東から）
　　２　第３号土壙（南から）
　　３　第４・５号土壙（南から）
　　４　第６号土壙（南から）
　　５　第７号土壙（南から）
　　６　第８号土壙（東から）
　　７　第10号土壙（東から）
　　８　第11号土壙（南西から）
図版６　１　第11号土壙遺物出土状況（南から）
　　２　第12号土壙（東から）
　　３　第13号土壙（北東から）
　　４　第14号土壙（南西から）
　　５　第15・16号土壙（北東から）
　　６　第15・16号土壙遺物出土状況（北東から）
　　７　第18・19号土壙（西から）
　　８　第21号土壙（東から）
図版７　１　第１号住居跡（第８図１）
　　２　第１号住居跡（第８図２）
　　３　第１号住居跡（第８図３）
　　４　第１号住居跡（第８図６）
　　５　第１号住居跡（第８図９）
　　６　第１号住居跡（第８図10）
　　７　第１号住居跡（第８図11）
図版８　１　第１号住居跡（第８図12）
　　２　第１号住居跡（第８図13）
　　３　第１号住居跡（第８図17）
　　４　第１号住居跡（第８図19）
　　５　第１号住居跡（第８図20）
　　６　第１号住居跡（第８図23）
　　７　第１号住居跡（第11図２）
図版９　１　第２号住居跡（第11図３）
　　２　第２号住居跡（第11図９）
　　３　第２号住居跡（第11図10）
　　４　第２号住居跡（第11図11）
　　５　第２号住居跡（第11図16）
　　６　第４号土壙（第14図２）
　　７　第15号土壙（第14図７）
図版10　１　第２号住居跡（第11図21）
　　２　第２号住居跡（第11図22・23）
　　３　第１号土壙（第14図１）
　　４　第１号住居跡（第８図）
　　５　第１号住居跡（第８・９図）
図版11　１　第２号住居跡（第11図）
　　２　第５・７・11・15・18・20号土壙（第14図）
図版12　１　グリッド（第15図１）
　　２　第１号住居跡カマド左袖石（第７図１）
　　３　第１号住居跡カマド右袖石（第７図２）

Ⅰ　発掘調査の概要

1．発掘調査に至る経過

埼玉県では、平成24年度から平成28年度の新5か年計画『埼玉県5か年計画―安心・成長・自立自尊の埼玉へ―』において「埼玉の成長を支える社会基盤を作る」という基本目標を掲げ、その一環として地域の生活を支える身近な道路の整備を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

都市計画道路環状1号線にかかる埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、平成25年5月15日付け東整第230号で、東松山県土整備事務所長より生涯学習文化財課長あて照会があった。

生涯学習文化財課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成26年5月30日付け教生文第463号で、宮前遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1　埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
宮前遺跡 (No.35-133)	集落跡	奈良・平安	比企郡小川町大字青山字田中地内

2　取扱い

埋蔵文化財が所在する範囲について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

発掘調査については、実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と東松山県土整備事務所、生涯学習文化財課の三者により調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議が行われた。その結果、平成26年8月1日から9月30日までの期間で、実施することになった。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、同法第92条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され発掘調査が実施された。

発掘調査に係る通知は以下の通りである。

平成26年6月25日付け　教生文第4－358号
平成26年7月23日付け　教生文第2－29号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2．発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

宮前遺跡の調査は都市計画道路環状１号線工事に先立ち、平成 26 年度に実施した。調査面積は 895 ㎡である。

平成 26 年８月１日に安全対策のため囲柵工事を実施し、同日から重機による表土除去作業を開始した。８月４日・６日に発掘事務所の設置を行った。囲柵終了後、８日から補助員による遺構確認作業を行い、並行して基準点測量及び遺構測量用のグリッド杭打設作業を実施した。

確認作業の結果、奈良時代の竪穴住居跡や縄文時代から中世にかけての土壙などの遺構が検出された。調査区の中央部から南側にかけて精査を開始し、順次土層断面図、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。９月 12 日には航空機による空中写真撮影を実施した。

その後、重機によって調査区を埋戻し、９月末に遺物、器材を撤収し、現地調査を終了した。

（2）整理報告書作成

整理報告書の作成作業は平成 27 年１月５日から平成 27 年２月 27 日まで実施した。

作業は出土遺物の水洗・註記から開始し、引き続き接合復元に着手した。復元を終えた遺物は順次実測、トレース、採拓を経て遺構ごとに印刷用の挿図を作成した。２月初旬には図版用の遺物写真を撮影した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等を照合し、修正を加えてスキャナーでコンピューターに取り込んだ。その後、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明等を組み込んで、印刷用の版下とした。

２月中旬までに原稿執筆を終え、報告書の編集を行った。入稿後、３回の校正を経て、平成 27 年３月 23 日に報告書（本書）を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、２月末に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3．発掘調査・報告書作成の組織

平成 26 年度（発掘調査）

理事長	樋田明男	**調査部**	
常務理事兼総務部長	大嶋紳一郎	調査部長	昼間孝志
総務部		調査部副部長	富田和夫
総務部副部長	瀧瀬芳之	調査監兼調査第一課長	赤熊浩一
総務課長	藤倉英明	主査	岩瀬譲
		主事	砂生智江

平成 26 年度（報告書作成）

理事長	樋田明男	**調査部**	
常務理事兼総務部長	大嶋紳一郎	調査部長	昼間孝志
総務部		調査部副部長	富田和夫
総務部副部長	瀧瀬芳之	主幹兼整理第二課長	大谷徹
総務課長	藤倉英明	主事	青木弘

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１．地理的環境

宮前遺跡は埼玉県比企郡小川町大字青山に所在し、ＪＲ八高線・東武東上線小川町駅から南西へ約1.4㎞に位置している。

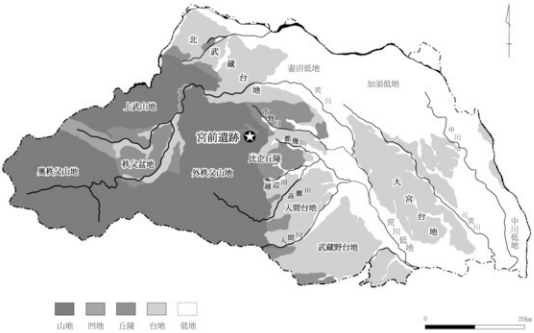
埼玉県は、起伏の有無で大きく三つの地形環境に分けられる（第１図）。山地を主とする秩父地域、それに連なる丘陵と武蔵野面相当の台地である中部地域、荒川・中川両低地と大宮台地等の洪積低台地が展開する東部地域（いわゆる埼玉平野）である。

小川町は、埼玉県のほぼ中央にあたる比企郡の北西部にあり、外秩父山地の東端から比企丘陵に至る山地と平野の境界部に位置する。

小川町の地形は、外秩父山地東縁部の小川盆地と、それを取り囲む標高200～300ｍ級の山地、町の北東に位置する市野川流域に発達した台地・丘陵地帯の三地域に分けられている。そのうち、小川盆地は槻川と兜川が合流する地域にあたり、両河川によって形成された河岸段丘が広く分布する。

宮前遺跡は、この小川盆地内を貫く槻川右岸の河岸段丘上に位置する。遺跡の標高は約96ｍで、100～300ｍ級の山地に取り囲まれている。

遺跡の位置する河岸段丘は、「小川市街地２面」と呼ばれる地層で、兜川と槻川の現河床面に接して細長く分布する（小川町1999）。小川市街地２面は層厚３～４ｍで、上位は砂まじりのシルト層、下位は砂礫層を主体とし、構成層中にローム層がみられない特徴をもつ。層中の礫は、径３～10㎝、最大20㎝の亜円礫から亜角礫が主で、基本は粗粒の砂である。宮前遺跡の南側に広がる大峰山や仙元山といった山地は、地質上では三波川変成帯にあたり、いわゆる緑泥片岩を代表とする結晶片岩で構成される。緑泥片岩は古くから人々に利用されてきた石材である。



第１図　埼玉県の地形

2．歴史的環境

小川町の遺跡分布は、大きく２つに分けることができる。宮前遺跡が位置する小川盆地周辺と、市野川流域沿いの丘陵上である。

以下、宮前遺跡（1）が位置する小川盆地周辺の遺跡の分布状況について、時代ごとに概観する（第２図）。

旧石器時代

小川町では、旧石器時代の遺跡はみつかっておらず、他の時期の遺物に混じって単発的に旧石器の出土が確認されているに過ぎない。大平遺跡（24）では、後期旧石器時代の黒曜石製ナイフ形石器が単独で出土している。

縄文時代

宮前遺跡の周辺には、縄文時代早期から中期を中心とする遺跡が分布している。

早期では、槻川右岸の丘陵上に位置する神名沢Ｂ遺跡（6）で、竪穴住居跡１軒が検出され、田戸下層・鵜ヶ島台・茅山式土器が出土している。大平遺跡（24）では、縄文早期の炉穴が検出されている。八幡台遺跡（11）は、槻川と兜川に挟まれる八幡台と呼ばれる台地に位置し、縄文時代から近世にかけて続いた町内最大規模の複合遺跡である。今までに19次に及ぶ発掘調査が行われ、早期の条痕文系土器が出土している（高橋・新井2009）。兜川右岸では、日附田遺跡（35）で鵜ヶ島台式、越場遺跡（41）で山形押型文・沈線文・条痕文系土器、番場遺跡（40）で条痕文系土器が出土している。

前期では、神名沢Ｂ遺跡（6）で、５軒の竪穴住居跡（諸磯ａ・ｂ式期）が発見された。八幡台遺跡（11）では、６軒の竪穴住居跡（二ッ木式～関山式期２軒、黒浜式期３軒、諸磯ａ式期１軒）が発見されている。番場遺跡（40）では、７軒の竪穴住居跡（黒浜式期中心）が確認され、越場遺跡（41）では諸磯各期に加えて、十三菩提式土器が出土している。

中期では、番場遺跡（40）と塚場遺跡（48）で勝坂式土器が、八幡台遺跡（11）では阿玉台式土器が出土している。八幡台遺跡（11）では、加曽利ＥⅠ式期に１軒、加曽利ＥⅢ式期に17軒の竪穴住居跡が確認され、加曽利ＥⅢ式を中心に集落が営まれていたと推定される。

後期になると小川盆地周辺では遺跡数は減少する。中期の竪穴住居跡が比較的多く検出された八幡台遺跡（11）では、称名寺式から堀之内式にかけての土器が出土するに留まる。この遺跡に近接する寺峯Ｂ遺跡（12）でも、土器が出土するのみで、遺構は確認されていない。そして、後期後半から晩期にかけての遺跡は、現状では確認されていない。

このように縄文時代に関しては、早期から中期にかけての遺跡が多く、後期から晩期の遺跡はほとんど発見されていない。

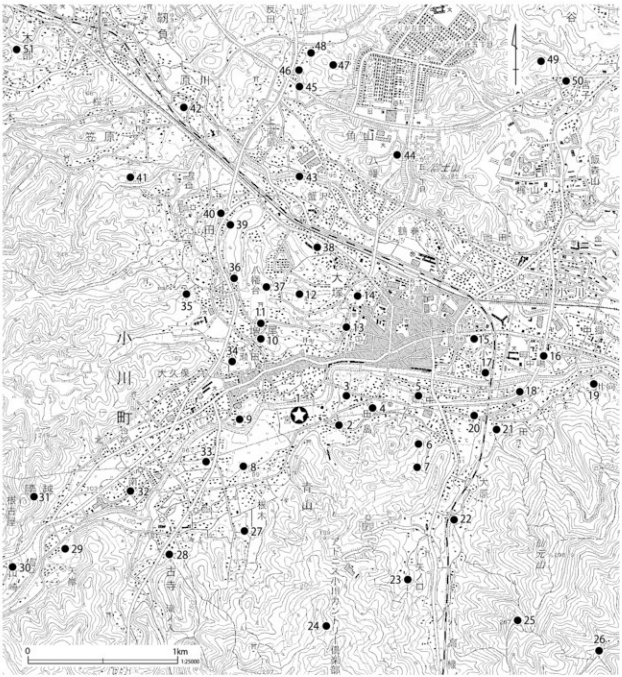
弥生時代

縄文時代後期・晩期と同じく、弥生時代の遺跡も小川町では確認されていない。土器は、越祢遺跡で吉ヶ谷式の土器片がわずかに出土したほか、小坂遺跡（28）で前野町式が表採されているに過ぎない。こうした状況から、今後、弥生時代の遺跡が確認される可能性もある。

古墳時代

古墳時代に入ると、小川町でも集落の形成や古墳の築造がみられるようになる。しかし、前期から中期にかけての遺跡は、周辺地域に比べて少なく、後期になると古墳と集落が本格的に現れる。

八幡台遺跡（11）では、円墳（八幡台古墳）と竪穴住居跡が１軒、そして近接する穴八幡古墳の周溝が検出されている。八幡台古墳は周溝のみが確認され、埋葬主体部や墳丘の状況は不明である。周溝の形状から約15ｍの円墳と考えられる。周溝外から土師器と切子玉が出土し、６世紀後半の築造と考えられる。



第２図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡一覧表

1 宮前遺跡	10 穴八幡古墳	19 川向遺跡	27 谷上遺跡	36 水穴遺跡	45 一ノ入遺跡
2 広地遺跡	11 八幡台遺跡	20 味正作遺跡	28 小坂遺跡	37 寺峯Ａ遺跡	46 塚場古墳
3 田島遺跡	12 寺峯Ｂ遺跡	21 大沢遺跡	29 矢岸遺跡	38 梅王塚	47 塚場塚
4 山際遺跡	13 中城跡	22 峯坂遺跡	30 山崎遺跡	39 長尾氏塚遺跡	48 塚場遺跡
5 耕地遺跡	14 春日井戸遺跡	23 金山遺跡	31 腰越城跡	40 番場遺跡	49 高谷砦遺跡
6 神名沢Ｂ遺跡	15 下町遺跡	24 大平遺跡	32 南遺跡	41 越場遺跡	50 宮子遺跡
7 神名沢Ａ遺跡	16 中嶋遺跡	25 青山城跡	33 堀北遺跡	42 飯ヶ井遺跡	51 宮山遺跡
8 田中遺跡	17 神明河原遺跡	26 割谷板碑石材採石遺跡	34 花ノ木遺跡	43 蟹沢遺跡	
9 金井遺跡	18 河原遺跡		35 日附田遺跡	44 寺ノ谷遺跡	

このように、小川盆地では後期古墳と集落についても、現状では確認された遺跡数は多くない。同様に、前方後円墳などの大型古墳も認められない。

しかし、前方後円墳の築造が終焉を迎え、終末期になると、この小川盆地では穴八幡古墳（10）が築造される。

穴八幡古墳（10）は墳丘長 28.2 m、高さ 5.6 mの方墳で、二重の周溝を伴っている。外側の周溝は一辺約 60 mである。埋葬主体部は、全長 8.3 mの複室構造の横穴式石室で、下里石と呼ばれる緑泥片岩の板石を組み合わせている。石室下部では、いわゆる掘込地業が行われている。確認調査により、須恵器の大甕や長頸壺、土師器坏、蕨手刀の装具と推定される足金物が出土しており、これらから 7 世紀後半の築造と考えられている。古墳構造・出土遺物ともに、当時の有力者廟の墓とみなせる内容だが、どのような背景でこの地に本墳が造られるに至ったのかについては不明な点も多い。

奈良・平安時代

奈良・平安時代には、集落遺跡が増加する。槻川右岸では、宮前遺跡の東方にある耕地遺跡（5）で、7 世紀後半から 9 世紀後半にかけての竪穴住居跡が 10 軒、神名沢A遺跡（7）で 8 世紀後半、味正作遺跡（20）で 8 世紀代の竪穴住居跡が確認されている。対岸の槻川左岸では、八幡台遺跡（11）で 8 世紀前半から 9 世紀中葉にかけての竪穴住居跡が発見された。

現状では、10 世紀から 11 世紀にかけての遺跡はほとんど確認されていない。

中世

小川町には、比企・大里・秩父地域と連なる城跡が分布する。そのうち、槻川左岸の丘陵上には青山城跡（25）、槻川右岸には中城跡（13）や腰越城跡（31）が位置する。中城跡（13）は、隣接する八幡台遺跡（11）でこれに関連する堀跡が調査された。

また、この地域は緑泥片岩の一大産出地である下里地域を中心に、板碑とそれに関連する遺跡が分布している。板碑の造立・保管地は、宮前遺跡周辺（大字青山）だけでも、41 地点 88 基に上る（小川町 1997）。兜田左岸にある一ノ入遺跡（45）では、板碑造立のための平場と、火葬跡と推定される遺構が確認されている。

近年、下里地域では板碑製作跡の分布・発掘調査が進められた。小川町教育委員会による分布調査の結果、下里・青山地域では、19 箇所の採掘遺跡が確認されている。そのうち、発掘調査が実施された割谷採掘遺跡（26）では、採掘から板碑形へ加工するまでの工程を推定できる数々の石材と遺構が確認された（高橋・吉田 2014）。この調査成果と関連遺跡の分布状況から、下里・青山地域は、14 世紀中葉以降の武蔵型板碑造立を支えた一大製作地と推定されている（高橋・吉田 2014）。

近世

江戸時代以降の遺跡は、八幡台遺跡（11）で土塁状遺構とされる事例が検出されているが、それ以外の確認事例は少ない。

なお、小川町には国指定重要文化財建造物に指定されている吉田家住宅がある。吉田家住宅は、享保 6 年（1721）に建築されたことが判明しており、建築実年代の明らかな県内最古の民家である。

このように、宮前遺跡を中心として、小川盆地に分布する遺跡を概観してきた。今後の調査により、遺跡が増加する可能性は高いが、現状では縄文時代早期から中期、古墳時代後期から奈良・平安時代、中世の遺跡が比較的多いといえよう。

Ⅲ　遺跡の概要

宮前遺跡は、比企郡小川町青山字田中1067外に所在し、遺跡のすぐ北側には槻川が東流する。この遺跡は、槻川が形成した河岸段丘である「小川市街地２面」に位置する（小川町1999）。周辺には水田が、南方の丘陵上には森林が多く残されている。

遺跡の範囲は、北から東に延びるＬ字形で、今回の調査区は、その北西端に位置する（第３図）。調査区は、北西から南東にかけて延びる細長い方形の区画である。調査面積は895㎡で、今回が初めての発掘調査である。

地形の傾斜は、わずかではあるが調査区中央がやや高く、南北両方向にかけて低く傾斜する。遺構確認面の標高は、調査区北部で約95ｍ、調査区中央の第２号土壙周辺で約95.5ｍ、調査区南部で約95ｍである。この起伏は、下位の基本土層Ⅵ層上面（遺構確認面）、Ⅹ･Ⅺ層上面（砂礫層）の土層堆積状況にも共通している。

基本土層は、調査区内で変化が大きいことから、４地点で確認した（第４図）。

Ⅰ層（表土）からⅡ層（水田床土）は水田層で、現代の撹乱を被っている。

Ⅲ層はＢ１グリッドで確認した層で、Ⅳ層上面に形成された凹地を埋めた客土の可能性がある。Ⅰ・Ⅱ層の水田耕作に伴うものと考えられる。

Ⅳ層は全地点で確認した層で、近世以降の客土である。

Ⅴ層はＡ２グリッドで確認した層で、槻川の氾濫により堆積した砂礫層と考えられる。

Ⅵ層はＥ５グリッドで確認した層である。Ｃ３グリッド周辺に比べて地形が低くなることから、Ⅴ層以上に先がけて堆積した層と推定される。奈良時代以降の土器片を含み、この層の下から土壙やピットを確認した。

Ⅶ層は全地点で確認した自然堆積層で、この層の上面が遺構確認面である。調査区で確認した遺構の多くは、この層を掘り込んでいる。ただし、Ⅶ層の層厚は一定していない。調査した遺構のうち、竪穴住居跡の柱穴や一部の土壙は、掘り込みが深くⅩ・Ⅺ層に達している。

Ⅷ層はＥ５グリッド、Ⅸ層はＣ３グリッドのみで確認した自然堆積層で、Ⅵ層と同様に、南側の低い地形に堆積している。

Ⅹ層とⅺ層は砂礫層で、「小川市街地２面」を構成する礫層に該当すると考えられる。

各層の形成された時代は、Ⅰ・Ⅱ層が近現代から現代、Ⅲ層が近現代、Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層が近世以降で、Ⅶ層上面で縄文時代後期から中世にかけての遺構を確認した。Ⅶ層以下は、縄文時代後期以前の層である。

今回の調査では、縄文時代後期の土壙１基、奈良時代の竪穴住居跡２軒、奈良・平安時代の土壙９基、中世の土壙４基、時期不明の土壙８基、ピット34基が検出された。

これらは、調査区中央のＢ３・Ｃ３グリッド、および調査区南側のＥ５グリッドに集中する。前者に奈良時代の竪穴住居跡と中世の土壙、後者に奈良・平安時代の土壙が分布する。

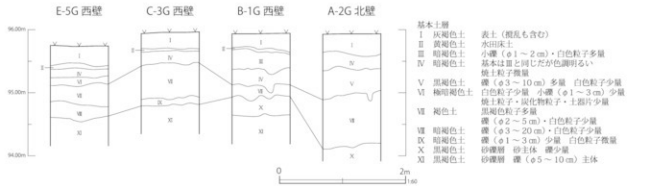
２軒の竪穴住居跡のうち、全体の様相がわかるのは、第１号住居跡のみであった。

第１号住居跡は、約4.5ｍ×６ｍの方形である。北壁にカマドが１基あり、その右脇に貯蔵穴が位置する。柱穴は４本で、壁溝はない。遺物は少なく、カマドと貯蔵穴から数点の土師器片が出土したものの、大半は覆土からの出土である。本住居跡の居住時期は、遺物から奈良時代前半と推定される。

第２号住居跡は、第１号住居跡と重複する形で検出した。平面形は不整形で、カマドや柱穴など架構に関わる施設は発見されなかった。本住居跡

遺跡の範囲
調査範囲
宮前
田中
根木
神名
氷川神社
里建橋
井
93.4
90.7
93.0
94.1
95.2
95.8
96.4
97.4
98.1
99.3
100.1
97.8
165.8
0
100m
1:2500

第３図　調査地点位置図



第４図　基本土層

の時期は、遺物から奈良時代中葉と推定される。

住居跡の周辺には奈良時代から中世にかけての土壙が分布する。そのうち、中世の土壙では、第１号・第５号・第７号土壙が、構造と覆土が共通することから、同時期に造られた可能性が高い。

遺構が分布する中央部と南部を除き、調査区北部とＤ３・Ｄ４グリッド周辺には、砂礫層が露出している。調査区北部の砂礫層は、Ａ２グリッドⅤ層に対応し、槻川の氾濫による堆積と考えられる。また、Ｄ３・Ｄ４グリッドの砂礫層も、基本土層との明確な対応関係は不明だが、Ⅶ層より上位に堆積していることから、これも河川氾濫に伴う堆積としておきたい。

調査区全体で、遺物は縄文土器、弥生土器、奈良時代の土師器と須恵器、土製品、鉄製品、中世の捏鉢、かわらけ、古銭などが出土している。これらの遺物は、いずれも小破片で全形が残るものはない。

縄文土器は第１号住居跡の覆土やＤ４グリッドから後期堀之内１式の土器細片が、第20号土壙で堀之内１式新段階の深鉢片が出土している。

弥生土器は第２号住居跡の覆土中から、吉ヶ谷式の折り返し口縁壺と思われる細片が１点出土している。

奈良時代の土師器と須恵器は、第１号・第２号住居跡や、第11号・第15号土壙、Ｅ５グリッドを中心に出土した。土師器は、坏・暗文坏・高台付坏・甕・小型台付甕・小型壺、須恵器は、坏・無台埦・蓋・稜埦・甕・長頸瓶がみられる。須恵器は南比企産の製品が主体を占める。

中世の土器は、捏鉢や内耳鍋が第５号・第18号土壙で、また、かわらけが第７号土壙で出土している。

古銭は第１号土壙から出土した。真書で「治平元寳」（初鋳1064年）が鋳出された北宋銭である。

今回調査を行った区画は、宮前遺跡の一部にすぎない。あえて、この調査区に限って宮前遺跡の形成過程をみると、縄文時代後期（堀之内１式新段階）に土壙が造られるが、縄文時代晩期から弥生・古墳時代にかけて遺構は認められない。奈良時代に入り、少数の竪穴住居跡が営まれる。この時期から中世まで断続的に土壙が造られる。近世以降になると、再び遺構・遺物ともに減少する。そして近現代に至り、水田が営まれるまで、人の定住しない空閑地になっていたと思われる。

中世以降の堆積をみると、調査区周辺は、度々槻川の氾濫にさらされていたと考えられる。こうした自然環境が、各時代の遺構がまばらに分布する状況の背景にあった可能性も考慮する必要があるだろう。

1
2
3
4
5
A
B
C
D
E
F
G
X=-5690
X=-5680
X=-5670
X=-5660
X=-5650
Y=-52580
Y=-52570
Y=-52560
Y=-52550
Y=-52540
砂礫層
砂礫層
砂礫層
SK18
SK19
SK9
SK6
SK22
SK10
SK21
SK7
SK4
SK3
SK5
SK1
SK2
SK17
SK12
SK13
SK20
SK8
SK11
SK14
SK15
SK16
SJ1
SJ2
0
10m
1:300

第５図　宮前遺跡全体図

Ⅳ　遺構と遺物

１．竪穴住居跡

第１号住居跡（第６～９図）

Ｂ３グリッドの南側からＣ３グリッド北側に位置する。壁面の一部は、第２号住居跡と第17号・第22号土壙に壊されている。検出された規模は東西方向4.54 m、南北方向6.06 m、深さ0.49 mである。主軸方向はＮ－３°－Ｗである。平面は方形であるが、南から北にかけてやや広がる。

住居跡の覆土は、１層と３層は自然堆積層で、２層と４層は第２号住居跡を造る際に埋め戻した層、５層と６層はカマドの崩落土と考えられる。

カマドは住居跡の北壁中央に位置する。焚口から煙出しまでは長軸約2.21mあり、燃焼部は壁を掘り込み、底面は平坦である。

カマドの袖には、緑泥片岩の板材を左右に１枚ずつ設置している。この石材は、掘り込み底面に置かれ、外側には石材の裏込を兼ねるように、明褐色土と暗褐色土を盛って袖を構成している。

左袖石は、長さ40.9cm、幅20.1cm、厚さ6.30cmで、上半部は欠損している。欠損部を除いた周縁部に加工痕が認められる。右袖石は、長さ39.4cm、幅21.0cm、厚さ5.50cmで、欠損はないが、不定形である。左袖石と同様に、周辺部に加工痕が認められる。両石材の加工痕は、全体的に摩耗しており、加工から袖材への利用までの一定期間、摩耗する環境におかれていたと推定される。この点から、何らかの石材を転用したと考えられる。なお、左袖石は上半部を欠損しているが、これは、左右袖石の大きさが近似することから、袖に利用する際に折った可能性がある。

カマド内部の堆積は、１層が天井部崩落土、２～５層が天井部崩落土・流入土、６・６’層が灰層、７層は掘方に対応する。９層と10層は袖材で、石材を支えるための裏込を兼ねている。

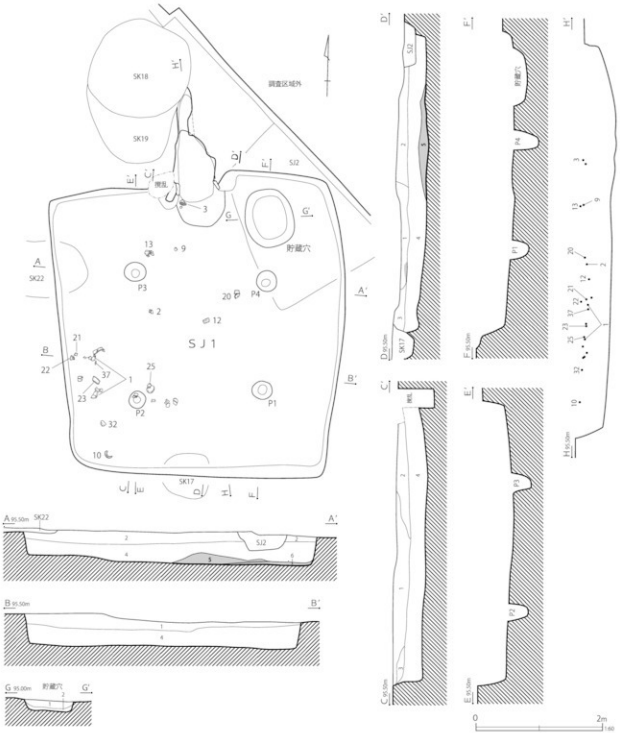
貯蔵穴はカマド右脇で１基検出した。楕円形で南北方向0.91 m、東西方向0.78 m、深さ0.18 mである。

ピットは４本検出され、主柱穴だろう。深さは0.28 m～0.40 mである。壁溝はなかった。

出土遺物は、土師器坏・暗文坏・甕・小型台付甕、須恵器坏・無台埦・蓋・長頸瓶・甕、土錘などがある（第８・９図）。いずれも破片である。カマドと貯蔵穴から、数点の土師器が出土したが、床面から遺物は出土しなかった（第６・７図）。出土遺物は南西部に集中する。層序別には、１・２・５層・貯蔵穴覆土層・カマド灰層から出土した。そのうち、カマド灰層から出土した土師器坏片（第８図６）が、住居跡の居住時期に近いと考えられる。

１～17は土師器である。１・２は北武蔵型坏。３・４は北武蔵型暗文坏で、内面に放射状暗文を施す。５は模倣坏の口縁部片である。６の坏は、内外面の調整は他の坏と同様だが、体部から口縁部にかけての屈曲がやや強い。７は坏。口径がやや大きい。８は小型壺である。９は壺で、口縁部が直立気味に立ち上がる。10は小型甕。11は台付甕の底部から脚部で、10と同一個体の可能性がある。12～17は甕で、そのうち、14は口縁部が外反する。17は頸部付近に沈線がめぐる。

18～36は須恵器で、南比企産が大半を占める。18～20は須恵器坏である。口径は13cm～14cm台で、底部に周辺回転ヘラケズリを施す。21～24・26は無台埦で、底部に周辺回転ヘラケズリを施す。25・27・28は坏底部片で、回転糸切り後、底部周辺回転ヘラケズリを行う。27は周辺回転ヘラケズリだが、腰が強く残る。29・30は蓋。31～33は大甕の破片。34は広口壺の頸部か。35・36は長頸瓶の口縁部で、胎土・焼成から湖西産と考えられる。37は土錘である。



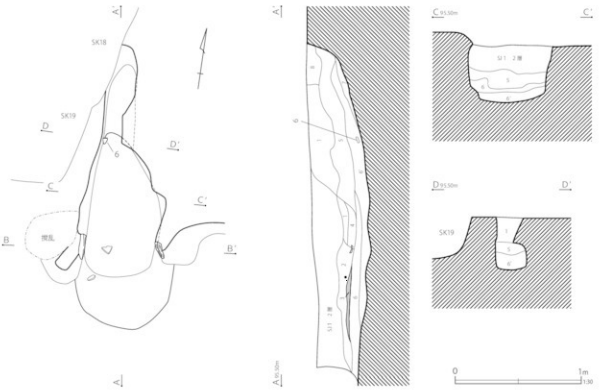
ＳＪ１

1	暗褐色土	小礫少量　焼土粒子（φ1～5㎜）・炭化物粒子（φ1～15㎜）中量　白色粒子（φ1～2㎜）多量　粘性強い　しまり強い
2	暗褐色土	小礫・白色粒子（φ1～2㎜）多量　焼土粒子（φ1～5㎜）・炭化物粒子（φ1～15㎜）中量　粘性強い　しまり強い
3	暗褐色土	小礫少量　白色粒子（φ1～2㎜）多量　焼土粒子（φ1～5㎜）・炭化物粒子（φ1～15㎜）粘性強い　しまり強い
4	黒褐色土	小礫（φ10～20㎜）・白色粒子（φ1～2㎜）少量　焼土粒子（φ1～5㎜）微量　炭化物粒子（φ2～3㎜）中量 粘性やや強い　しまり強い　ごく短期間に埋没した層　埋没しか
5	灰黄褐色土	焼土粒子（φ2～10㎜）・炭化物粒子（φ2～15㎜）多量　粘性強い　しまり強い　カマドからの流れ出しか？
6	にぶい黄褐色土	白色粒子（φ1㎜）極微量　シルト質　ローム質　粘性強い　しまり強い　カマドからの流れ出しか？

ＳＪ１貯蔵穴

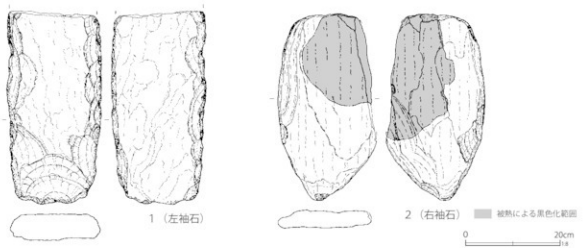
1	暗褐色土	白色粒子（φ1～2㎜）・炭化物粒子（φ2～5㎜）・焼土粒子（φ2～5㎜）多量　粘性強い　しまり強い
2	にぶい黄褐色土	白色粒子（φ1～2㎜）少量　焼土粒子(φ2～5㎜)微量　炭化物粒子（φ2～5㎜）極微量　粘性強い　しまりやや強い

第６図　第１号住居跡（１）

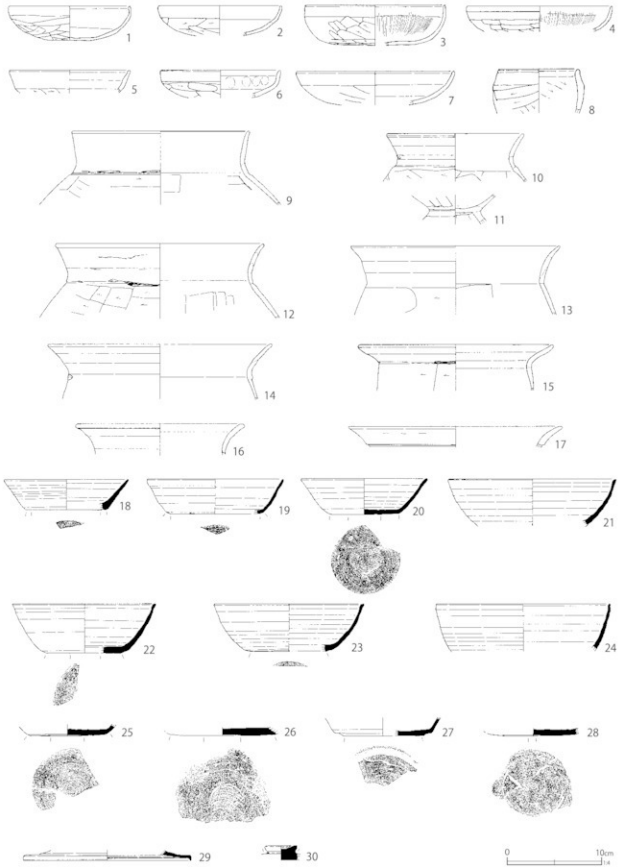


SJ1 カマド

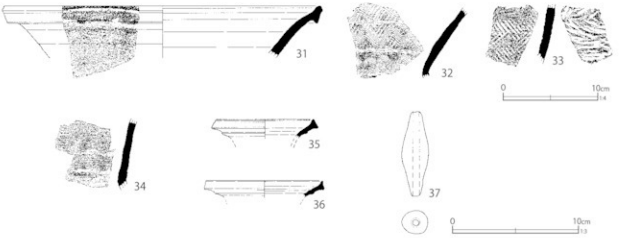
1	褐灰色土	小礫（φ5cm）微量　白色粒子（φ2mm）少量　焼土ブロック（φ15cm）微量　粘性強い　しまり強い
2	明茶褐色土	小礫（φ10cm）・炭化物粒子（φ2～10mm）多量　白色粒子（φ1～2mm）少量　焼土粒子（φ2～10mm）極多量　粘性強い　しまり強い
3	焼土と炭の堆積層	
4	暗赤褐色土	焼土粒子を主体とする　炭化物粒子（φ5mm）少量粘性強い　しまり強い
5	灰褐色土	焼土ブロック（φ5～20mm）多量　炭化物粒子（φ5～10mm）多量　粘性やや強　しまり強い
6	灰黄褐色土	焼土粒子（φ2～5mm）中量　炭化物粒子（φ5mm）少量　粘性強い　しまり強い
6'	灰黄褐色土	焼土粒子（φ5～10mm）少量　炭化物粒子（φ5～10mm）少量　粘性強い　しまり強い
7	にぶい赤褐色土	焼土粒子（φ2mm）微量　ローム粒子（φ2mm）多量　粘性強い　しまり強い
8	明褐色土	白色粒子（φ1～2mm）少量　炭化物粒子（φ5mm）・焼土粒子（φ2～5mm）多量　粘性強い　しまり強い
9	明褐色土	小礫（φ0.5cm）微量　白色粒子（φ1～2mm）多量　焼土粒子（φ2～5mm）多量　粘性強い　しまり強い
10	暗褐色土	小礫（φ0.5～1cm）中量　白色粒子（φ1～2mm）多量　焼土粒子（φ2～5mm）微量　粘性強い　しまり強い



第7図　第1号住居跡（2）・カマド袖石



第８図　第１号住居跡出土遺物（１）



第９図　第１号住居跡出土遺物（２）

第２表　第１号住居跡出土遺物観察表（第８・９図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.8)	3.6	4.6	CDHI	90	普通	橙	№9・14　1層	7-1
2	土師器	坏	(13.0)	[3.1]	—	AEIK	15	普通	にぶい橙	№6　1層	7-2
3	土師器	坏	(15.4)	[4.3]	—	CDHIK	20	普通	明赤褐	内面放射状暗文　№1　2層	7-3
4	土師器	坏	(15.7)	[2.7]	—	CDIK	15	普通	褐	内面放射状暗文　覆土	10-4
5	土師器	坏	(12.8)	[2.4]	—	AHIK	15	普通	にぶい黄橙	覆土	10-4
6	土師器	坏	(12.8)	[2.9]	—	ADEHIJK	30	普通	にぶい橙	内面指頭圧痕　カマド№3　カマド6'層	7-4
7	土師器	坏	(16.8)	[3.5]	—	CEHIK	10	普通	にぶい橙	貯蔵穴覆土	10-4
8	土師器	小型壺	(8.2)	[4.6]	—	CDEIK	25	普通	灰黄褐	覆土	10-4
9	土師器	壺	(18.9)	[7.8]	—	AHIK	15	不良	にぶい橙	№3　2層	7-5
10	土師器	小型甕	(14.5)	[5.2]	—	CHIK	40	普通	にぶい赤褐	№16　2層	7-6
11	土師器	台付甕	—	[3.3]	—	CDI	70	普通	灰褐	覆土	7-7
12	土師器	甕	(22.2)	[8.0]	—	CDHIK	15	普通	明赤褐	№5　2層	8-1
13	土師器	甕	(22.4)	[7.3]	—	CDHI	10	普通	にぶい橙	№4　2層	8-2
14	土師器	甕	(23.6)	[5.9]	—	CIK	5	普通	にぶい褐	カマド覆土	10-4
15	土師器	甕	(20.9)	[4.8]	—	CHIK	10	普通	明赤褐	貯蔵穴覆土	10-4
16	土師器	甕	(17.4)	[3.3]	—	CDEHIK	15	普通	明赤褐	貯蔵穴覆土	10-4
17	土師器	甕	(23.0)	[2.1]	—	EIK	40	普通	橙	5層	8-3
18	須恵器	坏	(13.2)	3.2	(8.8)	CDIJK	20	良好	灰黄	南比企産か　底部回転ヘラケズリ　内底径（8.6cm）内部高（2.6cm）カマド覆土	10-5
19	須恵器	坏	(14.6)	[3.6]	(9.6)	DIJK	25	良好	灰	南比企産　底部回転ヘラケズリ　内底径（10.4cm）内部高（3.1cm）覆土	8-4
20	須恵器	坏	(13.4)	3.8	7.5	IJK	65	良好	灰	南比企産　底部回転糸切り後回転ヘラケズリ　SJ2№18　内底径7.4cm　内部高3.2cm　2層	8-5
21	須恵器	椀	(17.8)	[5.0]	—	DIJ	5	普通	灰	南比企産　№8　1層	10-5
22	須恵器	椀	(15.2)	5.2	(8.0)	DEHIJK	15	普通	黄灰	南比企産　底部回転ヘラケズリ　№7　内底径（8.4cm）内部高（4.5cm）1層	10-5
23	須恵器	椀	(18.0)	5.0	(8.0)	DHIJ	30	普通	灰	南比企産　底部回転ヘラケズリ　№13　内底径（9.0cm）内部高4.3cm　1層	8-6
24	須恵器	椀	(18.6)	[5.0]	—	CDEHJ	10	不良	灰黄褐	南比企産　5層	10-5
25	須恵器	坏	—	[1.2]	(8.1)	DIJK	30	良好	にぶい褐	南比企産　底部回転糸切り後回転ヘラケズリ　№18　内底径（8.6cm）1層	10-5
26	須恵器	無台椀	—	[0.9]	(11.2)	DEIJ	70	良好	オリーブ灰	南比企産　底部回転糸切り後回転ヘラケズリ　覆土	10-5

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
27	須恵器	坏	—	[1.9]	(8.4)	DEIJK	20	普通	灰白	南比企産　底部回転ヘラケズリ　内底径（10.2cm）　覆土	10-5
28	須恵器	坏	—	[0.7]	(8.6)	DEHIJK	80	良好	灰	底部回転糸切り後回転ヘラケズリ　5層	10-5
29	須恵器	蓋	(17.8)	[1.1]	—	DHIJK	10	普通	灰	南比企産　覆土	10-5
30	須恵器	蓋（つまみ）	—	[1.6]	—	DIJK	80	良好	黄灰	南比企産？　つまみ径3.0cm　覆土	10-5
31	須恵器	甕	(34.0)	[5.5]	—	DEHIK	10	普通	灰	外面自然釉　櫛描波状文　覆土	10-5
32	須恵器	甕	—	[7.9]	—	DEHIK	5	良好	灰	№15　1層	10-5
33	須恵器	甕	—	[6.3]	—	HIK	5	普通	灰黄	5層	10-5
34	須恵器	広口壺	—	[7.5]	—	DEHIK	5	普通	暗褐	未野産か　覆土	10-5
35	須恵器	長頸瓶	(10.4)	[2.0]	—	AIK	15	良好	灰白	湖西産　覆土	10-5
36	須恵器	長頸瓶	(12.8)	[1.9]	—	IK	5	普通	灰白	湖西産　5層	10-5
37	土製品	土錘	長6.8cm 径2.1cm 厚さ1.8cm 孔径0.5cm 重さ18.8g			DIK	100	普通	にぶい橙	№10　1層	10-5

第３表　第１号住居跡カマド石材観察表（第７図）

番号	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	図版
1	袖石	緑泥片岩	[40.9]	20.1	6.3	8900.0	左袖石	12-2
2	袖石	緑泥片岩	39.4	[21.0]	5.5	5850.0	右袖石	12-3

第２号住居跡（第10・11図）

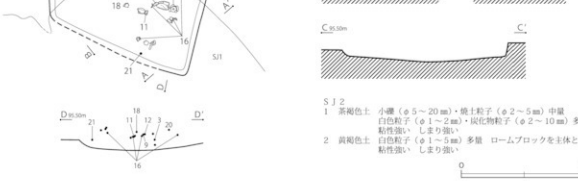
Ｂ３グリッドに位置する。調査開始時は、第１号住居跡の１軒のみと想定していたが、調査の進行に伴い、２軒の住居跡が重複した遺構と判断した。第２号住居跡の方が新しい。

一部は調査区外にかかるが、北壁と南壁、および南西隅角を検出した。これより平面形は不整方形と想定した。規模は、東西方向2.0 m、南北方向2.6 m、深さ0.2 mである。主軸方向は南壁を基準にすると、N－60°－Wである。覆土は茶褐色土や黄褐色土の自然堆積土である。

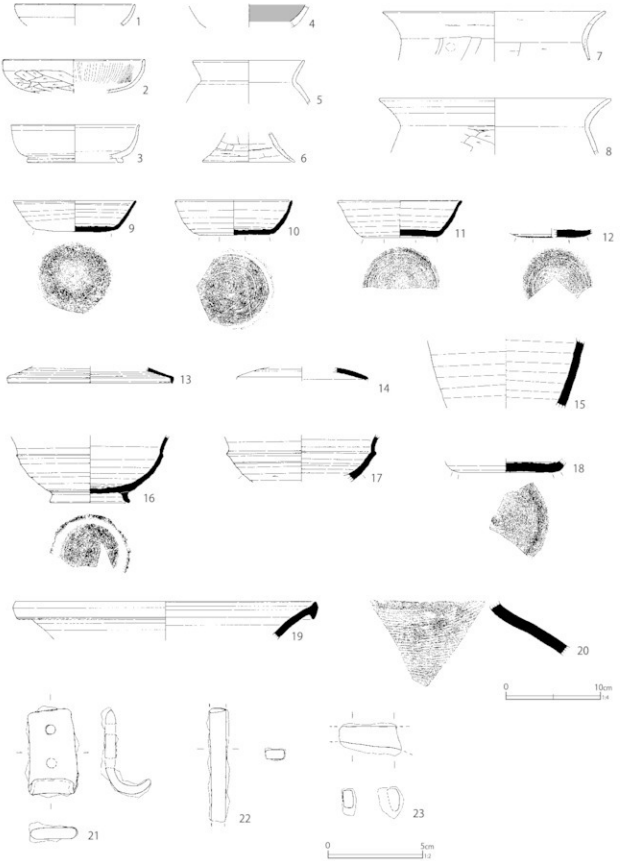
カマドは検出されず、覆土中からもカマド構築材の崩落土は確認できなかった。貯蔵穴やピットは認められなかった。

出土遺物は土師器坏・高台坏・暗文坏・甕、須恵器坏・稜埦・蓋・甕、内面黒色土器、不明鉄製品などがある。破片が多く、南西部に集中する。

１～８は土師器である。１は坏だが、調整等は



第10図　第２号住居跡



第 11 図　第 2 号住居跡出土遺物

不明。2は北武蔵型暗文坏。3はロクロ土師器の高台付坏で、底部周辺は回転ヘラケズリを行った上で、高台を張り付けている。口唇部は器壁を薄くさせつつ、やや外反させる。4は内面黒色処理を施した坏の破片。5は小型甕の口縁部で、6は小型台付甕の脚台部である。7・8は甕の口縁部。9～20は須恵器である。湖西産の14を除き、いずれも南比企産である。9～12は坏で、9は底部全体を回転ヘラケズリし、10～12は回転糸切り後、周辺回転ヘラケズリを行う。13と14は蓋。15は壺胴部片。16・17は稜埦で、いわゆる佐波理模倣埦である。16は粘土帯貼り付け後、細く整形して突帯を作り出している。全体的にロクロ目が強く残る。17は突帯が16に比べて強く張り出す。18～20は甕の破片。21～23は鉄製品である。21は4×2.5cmの長方形で、片方の端部を折り曲げている。平坦面に孔が2つある。孔周辺に有機物の付着は認められない。板の両端は折損しておらず、この形状で使用したと考えられる。釣手金具の一種と推定される。22は棒状鉄製品。23は刀子の関から茎部と考えられるが、錆による劣化が著しく、詳細は不明である。

また、これ以外に混入した遺物だが、吉ヶ谷式の壺と考えられる口縁部破片が出土した。折り返し口縁に粗い縄文を施す。

第4表　第2号住居跡出土遺物観察表（第11図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土師器	坏	(12.8)	[2.3]	－	HI	5	普通	灰	内面黒色処理？　1・2層	11-1
2	土師器	坏	(15.0)	[3.5]	－	ACDHIK	20	普通	灰黄褐	内面放射状暗文　1・2層	8-7
3	土師器	ロクロ土師器 高台付坏	(13.7)	4.0	(10.3)	CDHIK	30	普通	橙	底部回転ヘラケズリ　№2　1・2層	9-1
4	土師器	坏	－	[2.4]	－	EHI	10	普通	浅黄橙	内面黒色処理　1・2層	11-1
5	土師器	小型甕	(11.8)	[4.7]	－	AIK	10	普通	明赤褐	1・2層	11-1
6	土師器	小型台付甕	－	[3.1]	(9.8)	CHIK	20	普通	にぶい褐	1・2層	11-1
7	土師器	甕	(23.7)	[5.3]	－	CDEIK	5	普通	にぶい橙	1・2層	11-1
8	土師器	甕	(24.2)	[6.0]	－	DEHIK	15	普通	明赤褐	1・2層	11-1
9	須恵器	坏	(13.2)	3.3	8.2	DEGIJK	60	普通	にぶい褐	南比企産　底部回転ヘラケズリ　内底径8.1cm　内部高2.7cm　№14　1・2層	9-2
10	須恵器	坏	(12.6)	3.6	7.8	DEHIJK	60	良好	灰黄	南比企産　底部回転糸切り後回転ヘラケズリ　内底径(8.3)cm　内部高3.1cm　1・2層	9-3
11	須恵器	坏	(13.2)	3.9	(7.7)	IJK	40	良好	灰白	南比企産　底部回転糸切り後回転ヘラケズリ　内底径(8.4)cm　内部高3.0cm　№9　1・2層	9-4
12	須恵器	坏	－	[1.0]	7.4	DEIJK	60	良好	灰	南比企産　底部回転糸切り後回転ヘラケズリ　内底径7.8cm　№11　1・2層	11-1
13	須恵器	蓋	(17.6)	[1.8]	－	HIJK	15	普通	灰	南比企産　1・2層	11-1
14	須恵器	蓋	－	[1.5]	－	HK	5	良好	灰白	湖西産か　外面自然釉　1・2層	11-1
15	須恵器	壺	－	[7.5]	－	DEIJK	10	良好	灰	南比企産か　1・2層	11-1
16	須恵器	稜埦	－	[7.1]	(8.3)	DEIK	45	普通	灰	南比企産　佐波理模倣埦　№5・10・13・16　1・2層	9-5
17	須恵器	稜埦	－	[5.0]	－	IJ	15	普通	灰	南比企産　1・2層	11-1
18	須恵器	甕	－	[1.5]	10.0	DEHIJK	25	良好	黄灰	南比企産　底部回転ヘラケズリ　内底径(11.0)cm　№3　1・2層	11-1
19	須恵器	甕	(32.2)	[4.1]	－	DEHIJK	5	良好	灰白	南比企産　1・2層	11-1
20	須恵器	甕	－	－	－	ADIJ	5	良好	灰	南比企産　№1　1・2層	11-1
21	鉄製品	不明	長軸4.0cm　短軸2.5cm　厚さ0.6cm　重さ23.6g							釣手金具？　№19　1・2層	10-1
22	鉄製品	不明	長軸(6.0)cm　短軸0.85cm　厚さ0.5cm　重さ7.8g							棒状品　1・2層	10-2
23	鉄製品	不明	長軸(3.2)cm　短軸0.9～1.15cm　厚さ0.9～1.2cm　重さ7.0g							刀子？　1・2層	10-2

2．土壙

(1) 概要

土壙は調査区全体から22基検出された。これらはB３・C３グリッドとE４・E５グリッドに集中し、砂礫層が露出する面には分布しない。

内訳は、縄文時代後期が１基、奈良・平安時代が９基、中世が４基、不明が８基である。時期の区分は出土遺物と覆土の状態により行った。検出位置、規模、長軸方向、重複関係については第５表に示した。

縄文時代後期の土壙は、C２グリッドの基本土層断面上で第20号土壙が検出された。覆土は黒褐色土と暗褐色土が中心である。

奈良・平安時代の土壙は、基本的な平面形は円形、ないし楕円形である。覆土は暗褐色土が中心である。そのうち、第17号・第19号・第22号土壙は、遺物の出土量はわずかだったが、第１号住居跡を壊していることから、住居跡よりも新しい時期の遺構と判断した。

中世の土壙は、第１号・第４号・第５号・第７号土壙がC３グリッドに集中する。そのうち、第１号・第５号・第７号土壙は長方形、第４号土壙は円形である。いずれも覆土は褐色土を主体とする。第１号・第５号・第７号土壙は、長軸長1.5m×短軸長１m、深さ30～45cmと同規模で、覆土も褐色土を主体とする点で共通することから、近接した時期に造られたと考えられる。

以下、代表的な例について説明する。

第１号土壙（第12・14図）

C３グリッドで検出された。平面形は長方形で、覆土は褐色土と暗褐色土である。北宋銭（「治平元寶」初鋳1064年）が出土した。

第４号土壙（第12・14図）

C３グリッドで検出された。平面形は円形で、覆土は褐色土の単層である。第５号土壙に壊されている。捏鉢をはじめ、土師器・須恵器の細片が出土した。

第５号土壙（第12・14図）

C３グリッドで検出された。平面形は長方形で、覆土は褐色土と茶褐色土である。内耳鍋の破片が出土した。

第７号土壙（第12・14図）

C３グリッドで検出された。平面形は不整長方形で、覆土は褐色土と茶褐色土である。東側立ち上がり部分に焼土が認められた。かわらけと内耳鍋のほか、土師器・須恵器の細片が出土した。

第11号土壙（第13・14図）

E５グリッドで検出された。平面形は円形で、覆土は暗褐色土の単層で、礫が混じる。須恵器坏をはじめ、土師器・須恵器の細片が出土した。

第15号土壙（第13・14図）

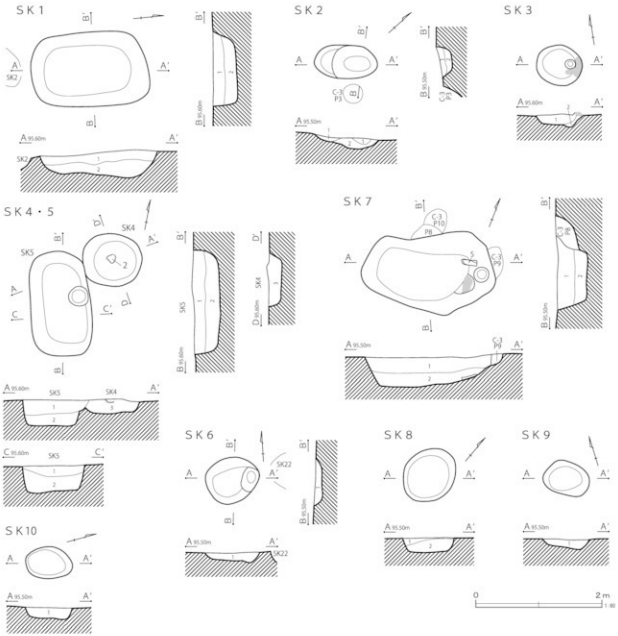
E５グリッドで検出された。掘り込みの南側は第16号土壙に壊され、東側は調査区外に延びるため、平面形は不明である。立ち上がりを確認した部分から、平面形は長方形と推定される。覆土は暗褐色土と黒褐色土主体で、礫が多く含まれる。土師器暗文坏をはじめ、土師器・須恵器の細片が他の土壙よりも多く出土した。

第16号土壙（第13図）

E５グリッドで検出された。第15号土壙を壊していた。掘り込みの東側は調査区外に延びるが、平面形は長方形と推定される。覆土は暗褐色土主体で、礫が混じるが、これは第15号土壙に由来するものだろう。土師器の細片が出土した。

第20号土壙（第13・14図）

C２グリッドの基本土層断面上で確認したため、平面形は不明である。覆土は下層から黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積している。第３層中から縄文時代後期（堀之内１式新段階）の深鉢片が出土した。



SK1（C-3G）
1　褐色土　小礫（φ0.5cm）・白色粒子（φ2～5mm）・多量　焼土粒子・炭化物粒子少量　粘性弱い　しまりとても強い
2　暗褐色土　小礫（φ0.5cm）・炭化物粒子微量　白色粒子（φ2～5mm）少量　粘性弱い　しまり強い

SK2（C-3G）
1　暗褐色土　白色粒子（φ1～5mm）多量　炭化物粒子微量　粘性弱い　しまり強い
2　褐色土　小礫（φ0.3～0.5cm）中量　白色粒子（φ1～5mm）少量　粘性弱い　しまり強い

SK3（C-3G）
1　褐色土　小礫（φ0.5cm）少量　白色粒子（φ1～2mm）多量　焼土粒子微量　粘性弱い　しまり強い
2　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子（φ2～5mm）多量　粘性弱い　しまり強い

SK4・5（C-3G）
1　褐色土　小礫（φ0.5～1cm）きわめて多量　白色粒子（φ1～5mm）多量　炭化物粒子微量　粘性強い　しまり強い
2　茶褐色土　小礫（0.5～1cm）少量　白色粒子（φ1～5mm）多量　炭化物微量　粘性強い　しまり強い
3　褐色土　小礫（φ0.5～1.5cm）・白色粒子（φ1～2mm）・多量　焼土粒子中量　粘性強い　しまり強い

SK6（B-3G）
1　明黄褐色土　白色粒子（φ1～2mm）多量　ローム粒子（φ5mm）微量　粘性弱い　しまり強い

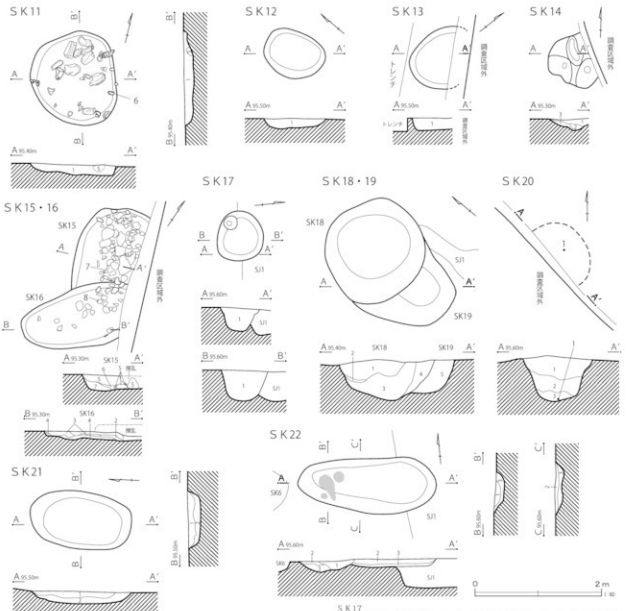
SK7（C-3G）
1　褐色土　小礫（φ0.5～2cm）少量　白色粒子（φ1～2mm）多量　粘性強い　しまり強い
2　茶褐色土　白色粒子（φ1～2mm）・焼土粒子・炭化物粒子多量　粘性強い　しまり強い　砂っぽくジャリジャリしている

SK8（D-4G）
1　黒褐色土　小礫（φ1～2cm）少量　褐色粒子・白色粒子多量　粘性なし　しまり強い
2　暗褐色土　小礫（φ1～3cm）褐色粒子多量　白色粒子含む　粘性なし　しまり強い

SK9（B-3G）
1　暗褐色土　白色粒子（φ1～2mm）多量　炭化物粒子微量　ロームブロック微量　粘性強い　しまり強い

SK10（C-2G）
1　茶褐色土　白色粒子（φ1～2mm）多量　炭化物粒子・焼土粒子（φ2mm）微量　粘性強い　しまり強い

第12図　土壙（1）



SK11（E-5G）
1　暗褐色土　白色粒子（φ1～2㎜）中量　焼土粒子少量　炭化物粒子微量
　　粘性強い　しまり強い

SK12（C-4G）
1　茶褐色土　白色粒子（φ1～2㎜）・炭化物粒子・焼土粒子多量
　　粘性強い　しまり強い

SK13（C-4G）
1　茶褐色土　多量の褐色粒子　小礫（φ1～2㎝）・白色粒子少量　焼土粒子微量

SK14（E-5G）
1　暗褐色土　小礫（φ1㎝大）・白色粒子少量　褐色粒子多量
　　粘性強い　しまり強い
2　黒褐色土　褐色粒子少量　粘性強い　しまり弱い
3　褐色土　小礫（φ1㎝）微量　暗褐色粒子多量　粘性強い　しまり強い

SK15・16（E-5G）
1　暗褐色土　小礫（φ1～2㎝）少量　焼土粒子・炭化物粒子微量
　　粘性強い　しまり強い
2　暗褐色土　焼土粒子・炭化物粒子多量　白色粒子微量　粘性強い　しまり強い
3　暗褐色土　焼土粒子・焼土ブロック（φ1㎝）多量　炭化物粒子・白色粒子微量
　　粘性強い　しまり強い
4　褐色土　暗褐色粒子少量　焼土粒子微量
5　暗褐色土　小礫（φ1～3㎝）・黒褐色粒子多量　焼土粒子少量　炭化物粒子
6　黒褐色土　小礫（φ1㎝大）多量　焼土粒子・炭化物粒子少量
7　暗褐色土　小礫（φ1～3㎝）多量　焼土粒子微量

SK17
1　暗褐色土　白色粒子（φ1～2㎜）・炭化物粒子（φ2～5㎜）・焼土粒子
　　（φ2～10㎜）多量

SK18・19（B-3G）
1　暗褐色土　小礫（φ1～2㎝）・焼土粒子・褐色粒子・炭化物粒子少量
　　白色粒子多量
2　褐色土　暗褐色粒子多量
3　黒褐色土　小礫（φ1㎝大）多量　白色粒子・焼土粒子・炭化物粒子少量
4　暗褐色土　小礫（φ1㎝大）少量　白色粒子・焼土粒子微量
5　黒褐色土　小礫（φ1㎝大）・焼土粒子微量　白色粒子少量

SK20（C-2G）
1　褐色土　小礫（φ1㎝）・白色粒子少量　焼土粒子微量
2　暗褐色土　1層に似るが色調やや暗い
3　黒褐色土　小礫（φ1㎝）少量　白色粒子・炭化物粒子微量

SK21（B-2G　C-2G）
1　黒褐色土　小礫（φ0.5～2㎝）・白色粒子　少量の焼土粒子・炭化物粒子
　　確くしまっている
2　暗褐色土　白色粒子・炭化物粒子少量　しまり強い

SK22（B-3G）
1　暗褐色土　白色粒子（φ1～2㎜）少量　焼土粒子（φ2～5㎜）多量
　　炭化物粒子（φ1～2㎜）中量　粘性強い　しまり強い
2　暗褐色土　白色粒子（φ1～2㎜）中量　焼土粒子（φ1～2㎜）・
　　炭化物粒子（φ1～2㎜）微量　粘性強い　しまり強い
3　黄褐色土　白色粒子（φ1～2㎜）少量　焼土粒子（φ1～2㎜）・
　　炭化物粒子（φ1～2㎜）極微量　粘性強い　しまり強い

第13図　土壙（2）

第５表　土壙一覧表（第12・13図）

遺構名	グリッド	重複	長軸方位	長さ（m）	幅（m）	深さ（m）	平面形	備考
SK1	C－3		N－3°－E	1.86	1.17	0.30	長方形	
SK2	C－3		N－48°－E	0.99	0.52	0.17	楕円形	
SK3	C－3		N－56°－W	0.71	0.62	0.18	円形	
SK4	C－3	SK5	N－85°－E	0.93	0.82	0.24	円形	
SK5	C－3	SK4	N－17°－W	1.64	0.95	0.43	長方形	
SK6	B－3		N－67°－E	0.83	0.70	0.42	円形	
SK7	C－3	C－3G P8～10	N－68°－E	2.06	1.31	0.45	不整長方形	
SK8	D－4		N－8°－E	0.92	0.78	0.23	円形	
SK9	B－3		N－48°－W	0.70	0.51	0.15	楕円形	
SK10	B・C－2		N－14°－E	0.72	0.50	0.18	楕円形	
SK11	E－5		N－36°－W	1.46	1.31	0.16	円形	
SK12	B・C－4		N－20°－W	0.97	0.72	0.15	楕円形	
SK13	C－4		N－44°－W	0.98	(0.65)	0.19	円形	
SK14	E－5		N－29°－W	0.85	(0.67)	0.17	不整形	
SK15	E－5	SK16	N－16°－W	1.81	(0.96)	0.24	長方形	
SK16	E－5	SK15	N－42°－E	(1.55)	0.90	0.13	長方形	
SK17	C－3	SJ1	－	(0.77)	(0.31)	0.33	円形	
SK18	B－3	SJ1カマド・SK19	N－67°－E	1.68	1.56	0.62	円形	
SK19	B－3	SJ1カマド・SK18	N－89°－E	1.25	(0.73)	0.48	楕円形	
SK20	C－2		－	－	－	0.68	－	断面図のみ
SK21	B・C－2		N－9°－E	1.61	0.90	0.19	楕円形	
SK22	B－3	SJ1	N－83°－W	(1.65)	0.87	0.16	楕円形	

（2）土壙出土遺物

第１号土壙出土遺物（第14図）

北宋銭が１点出土した。完形で、表面には真書体で「治平元寶」（初鋳1064年）銘がみられる。他に共伴する遺物はなかった。

第４号土壙出土遺物（第14図）

中世の捏鉢片が出土した。２は外面底部付近に、帯状に黒色の有機物が付着している。これに沿って器面も黒色に焼けている。焼成時に何らかの理由で有機物を巻き付けたものが、焼け焦げて遺存したと考えられる。内外面には、ロクロ目と輪積み痕が明瞭に残る。土師器・須恵器の細片も出土したが、混入と考えられる。

第５号土壙出土遺物（第14図）

内耳鍋の破片が数点出土した。いずれも接合せず、全体を窺える資料はない。３は胴部から頸部の破片である。頸部内面は、屈曲が突帯状に明瞭につくられる。４は胴部から底部の破片である。

第７号土壙出土遺物（第14図）

かわらけが１点出土した。５は残りが悪いが、かわらけは調査区内で唯一の出土資料である。口縁部の破片で、内外面に薄くロクロ目が残る。やや内湾するが、器壁は直線的である。胎土は砂粒を多く含む。土師器･須恵器の細片も出土したが、混入と考えられる。

第11号土壙出土遺物（第14図）

須恵器坏が１点出土した。６は内外面にロクロ目が残る。器壁は薄手で、焼成も良くない。底部整形は不明である。末野産である。土師器・須恵器の細片も出土したが、混入と考えられる。

第15号土壙出土遺物（第14図）

土師器・須恵器の破片が比較的多く出土した。そのうち、７は北武蔵型暗文坏で、放射状暗文を施す。口径は11.8cmで、丸底である。器面は口縁部をヨコナデ、体部をヘラケズリで調整する。

第１号住居跡と同時期と考えられる。８は土師器の小型甕である。

第 16 号土壙出土遺物

細片のため図示できなかったが、土師器が出土した。本土壙は、他の土壙のような中世遺物の出土もみられない。第 15 号土壙と同時代の可能性が高い。

第 18 号土壙出土遺物（第 14 図）

焙烙が１点出土した。９は口縁部の破片で、磨滅が激しい。土師器・須恵器の細片も出土したが、混入と考えられる。

第 20 号土壙出土遺物（第 14 図）

縄文土器が出土した。遺構に伴う縄文土器は、10 が唯一の資料である。10 は器面に縦方向と弧状の細い沈線がめぐり、懸垂文を構成する。縄文はない。器壁は薄く、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良くない。堀之内１式新段階の深鉢と考えられる（石井 1995・加納 2008）。

第 14 図　土壙出土遺物

第６表　土壙出土遺物観察表（第14図）

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	SK1	古銭	治平元寶	縦 23.00㎜　横 23.00㎜　厚さ 1.10～1.50㎜　重さ 2.4ｇ							真書　北宋　初鋳1064年　覆土	10-3
2	SK4	瓦質陶器	捏鉢	－	[6.5]	(14.0)	DEGIK	20	普通	橙	SK4 №1　3層	9-6
3	SK5	瓦質陶器	内耳鍋	－	[8.2]	－	ACDEIK	5	普通	黄灰	覆土	11-2
4	SK5	瓦質陶器	内耳鍋	－	[5.4]	(27.0)	DEHIK	15	普通	灰黄褐	覆土	11-2
5	SK7	かわらけ	皿	(10.8)	[1.7]	－	ADEHIK	20	普通	橙	覆土	11-2
6	SK11	須恵器	坏	(14.7)	[3.9]	－	AGHIK	25	不良	灰黄	末野産　SK11 №3　1層	11-2
7	SK15	土師器	坏	(11.8)	[3.2]	－	CDHIK	25	普通	明赤褐	内面放射状暗文　SK15 №6　1層	9-7
8	SK15	土師器	小型甕	(10.6)	[6.5]	－	DEGIK	20	普通	明赤褐	SK15 №1　1層	11-2
9	SK18	瓦質土器	焙烙	(27.4)	[4.4]	－	ADEGHIK	20	普通	にぶい褐	覆土	11-2
10	SK20	縄文土器	深鉢	－	[8.4]	－	EHIK	10	不良	明赤褐	堀之内1式新段階　SK20 №1　3層	11-2

3．ピット

ピットはＣ３・Ｅ４・Ｅ５グリッドに集中する（第７表）。位置関係に規則性はみられず、長径約20cm ～ 40cm、深さ約10cm ～ 20cm が主体を占める。覆土は、褐色土や暗褐色土の単層が多く、周辺の土壙と共通する。出土遺物は、土師器や須恵器の細片のみである。

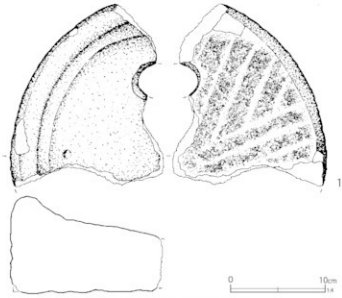
第７表　ピット一覧表

名称	番号	長径/cm	深さ/cm
B-3G	P1	34.0	12.0
	P2	27.0	13.0
C-3G	P1	27.0	34.0
	P2	30.0	11.0
	P3	32.0	26.0
	P4	34.0	34.0
	P5	24.0	23.0
	P6	27.0	10.0
	P7	39.0	37.0
	P8	40.0	31.0
	P9	46.0	13.0
	P10	35.0	20.0
	P11	24.0	8.0
	P12	23.0	7.0
	P13	23.0	32.0
D-4G	P1	52.0	34.0
E-4G	P1	33.0	13.0
	P2	40.0	10.0
	P3	36.0	16.0
	P4	32.0	53.0
E-5G	P1	25.0	7.0
	P2	22.0	8.0
	P3	44.0	13.0
	P4	39.0	20.0
E-5G	P5	43.0	22.0
	P6	51.0	13.0
	P7	36.0	15.0
	P8	26.0	11.0
	P9	36.0	51.0
	P10	29.0	11.0
	P11	25.0	9.0
	P12	26.0	10.0
	P13	42.0	20.0
	P14	46.0	11.0

4．グリッド出土の遺物

グリッド出土遺物の内訳は、Ｂ２（１点）・Ｂ３（１点）・Ｃ３（11点）・Ｃ４（41点）・Ｄ４（10点）・Ｅ４（75点）・Ｅ５（227点）で、Ｅ５グリッドが最も多かった。遺物は、土師器・須恵器が中心で、わずかに縄文土器と中世陶器・陶磁器が認められた。そのうち、Ｄ４グリッドでは縄文時代後期堀之内１式の細片、および石臼が出土した。

この石臼は、粉挽き臼の上臼片である（第15図１）。表面は縁を幅約４cm 残して、その内側を３cm 前後凹ませている。供給口は1/2ほど残存する。裏面には断面丸底で幅約１cm の目が、約２cm 間隔で施される。目は放射状に２単位ある。中心付近は破損しており、芯棒受けは不明瞭である。



第15図　グリッド出土遺物

第８表　グリッド出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	石材	長さ	幅	厚さ	径	供給口	重さ	備考	図版
1	石製品	石臼	安山岩	[19.3]	[16.2]	10.6	(35.4)	(3.4)	3,920	D-4G　上臼	12-1

Ⅴ　調査のまとめ

宮前遺跡は今回初めて調査が行われた。その結果、縄文時代から中世にかけての遺構と遺物が検出された。各時代の様相を示し、宮前遺跡の位置づけを行うことでまとめにかえたい。

縄文時代　第20号土壙をはじめ、後期堀之内１式から堀之内２式にかけての土器片が出土したことから、調査区周辺に遺構が分布している可能性がある。

奈良時代　第１号住居跡と第２号住居跡は、遺構の重複状況から第１号住居跡の方が古いと考えた。遺物では、第１号住居跡のカマド６’層（灰層）から出土した土師器坏（第８図６）が、本住居跡の時期決定上、重要な資料である。

本例は、口縁部がやや外反気味に直立する。外面は口縁部をヨコナデし、体部下半はヘラケズリを施す。深谷市熊野遺跡を参考にすると、熊野Ⅱ期の坏Ｃ２類に該当する（富田2002）。熊野遺跡ではＣ区６号住居跡に類例があり、熊野Ⅱ期新相とされる。この段階の年代推定資料として、深谷市内出遺跡第12号住居跡が取り上げられ、ここから本段階を８世紀第１四半期後半としている（鬼形1986、酒井1987）。

一方、覆土中の出土遺物をみると、まず、北武蔵型暗文坏の第８図３と４は、熊野Ⅲ期新相（暗文坏Ｂ２類）の特徴をもつ。本段階は鳩山Ⅲ期中葉からⅣ期前半にあたり、８世紀中葉から第３四半期と推定されている。須恵器坏は、法量から判断すると、第８図18（カマド覆土）が鳩山Ⅲ期中葉、19（覆土）が鳩山Ⅱ期、20（第２層）が鳩山Ⅲ期後半に該当する（渡辺1988・1990、古代入間を考える会2012）。およそ８世紀第２四半期から第３四半期とされる。こうした点から、カマド灰層から出土した土師器坏が、やや古い時期を、覆土出土遺物がそれよりも新しい時期を示すことがわかる。

以上より、第１号住居跡の時期は、８世紀前葉としておきたい。その後、８世紀中葉に埋没し、第２号住居跡へ移行したと考えられる。

次に、第２号住居跡では、覆土から出土した北武蔵型暗文坏（第11図２）や須恵器坏類（９～12）、稜埦（16・17）が時期の判断材料となる。

北武蔵型暗文坏の２は、第１号住居跡出土例と同様の特徴をもち、同時期の資料である。

須恵器坏は、法量からみると９が鳩山Ⅲ期中葉、10が鳩山Ⅳ期前半、11が鳩山Ⅲ期中葉に該当する（渡辺1988・1990、古代入間を考える会2012）。10は胴部がやや丸みをもち、器壁もやや厚い。およそ８世紀中葉から第３四半期にあたる。

稜埦は、鳩山窯跡群では鳩山Ⅱ期からⅣ期にかけてみられる。器形は低平型と深身型に分かれる。そのうち、第11図16は深身型で、高台・突帯設定方法・突帯位置などが、鳩山窯跡群第３号住居覆土上層遺物、広町Ｂ第６号窯状遺構出土遺物と近い。どちらも鳩山Ⅲ期に属するが、前者は鳩山Ⅲ期後半（８世紀第３四半期）と細分される。

以上より、第２号住居跡の時期は、８世紀半ばから第３四半期と考えられる。

また、本住居跡の特徴的な遺物に、土師器高台付坏（３）がある。類例は、本庄市将監塚・古井戸遺跡にあるが、これらはロクロ整形でやや時期が新しい。本例もロクロ整形の痕跡が認められ、共通する。ここでは上述の共伴遺物と同時期と考えておきたい。

さて、第１号住居跡では、カマドの袖材に緑泥片岩が用いられていた。２枚の石材には、縁辺に加工痕が複数認められる。これらは摩耗しており、カマドに使用する以前に、一定期間、石材が摩耗する環境にあったと考えられる。つまり、両石材の加工痕は、カマドに用いる際に加工したのでは

なく、それ以前の時代に、何らかの用途で調整した石材を転用したと考えられる。

緑泥片岩は、埼玉県内の奈良時代以前の遺跡では、主に縄文時代の石器や古墳時代の石棺、横穴式石室に利用例がある。どちらの転用と考えると、より蓋然性が高いだろうか。

第１号住居跡は奈良時代初頭にあたる。この時期は、県内では古墳への追葬、前庭部や周溝での土器供献行為が継続する時期で、古墳の破壊はみられない。そして、石棺と横穴式石室のどちらの場合であっても、石材自体は盛土に覆われ、入口も閉塞された「室内」の環境におかれる。古墳使用石材自体が転用材でない限り、加工痕が磨滅する現象は生じない。古墳使用石材を本住居跡のカマド材に転用したとは考え難いだろう。

ここでは、石材の法量も踏まえて、縄文時代の石皿を再利用したと推定しておきたい。

緑泥片岩を構築材に用いるカマドについては、近隣の耕地遺跡で、３基確認されている（上野1998）。これらには転用材の利用は認められない。しかし、両遺跡をはじめ、周辺の遺跡でカマドに緑泥片岩を用いる共通点は、カマド構築材に地域性があることを示唆している。県内各地にみられるカマドの構造と構築材は、粘質土、各種石材（礫など）、土師器転用、地山削り出しと多様である。カマドの構築に材料を必要とする場合、その獲得と使用には、各地特有の地質・石材分布状況がある程度、影響を与えていると想定される。

第１次調査の成果を総合すると、まず、いずれの時代の遺構も、調査区外へ続くことから、周辺にも同様の遺構が分布しているだろう。

縄文時代に関しては、少数とはいえ、出土した土器は後期の資料であった。周辺でも事例は少なく、当該期の資料が増加したことは重要である。

奈良時代の竪穴住居跡は、周辺でも比較的確認例が多い。奈良時代の遺跡数が増加するという現象について、小川町周辺でも検討していくための資料が得られた。

中世に関する成果はわずかだったが、周辺には下里・青山板碑石材採掘遺跡群をはじめ、中世遺跡が多く分布する。今後、この地域一帯の中世の動向を考えていくなかで、評価するべきだろう。

引用・参考文献

赤熊浩一　1988 『将監塚・古井戸　歴史時代編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 71 集

石井　寛　1995 『川和向原遺跡・原出口遺跡』 横浜市ふるさと歴史財団

上野真由美　1998 『耕地遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 204 集

小川町　1999 『小川町の自然』地質編

小川町　1999 『小川町の歴史』資料編１考古

鬼形芳夫　1986 『内出遺跡』 内出遺跡調査会

加納　実　2008 「堀之内式土器」『総覧縄文土器』 pp.586-593　アム・プロモーション

古代入間を考える会　2012 『古代入間の土器と遺跡（Ⅰ）』

酒井清治　1987 「武蔵国における須恵器年代の再検討」『研究紀要』第９号　pp.125-148　埼玉県立歴史資料館

高橋好信・新井　貴　2009 『八幡台遺跡（19 次）』小川町埋蔵文化財調査報告書第 30 集　小川町教育委員会

高橋好信・吉田義和　2014 『下里・青山板碑石材採掘遺跡群―朔谷採掘遺跡―』小川町埋蔵文化財調査報告書第 33 集　小川町教育委員会

富田和夫　2002 「熊野遺跡（Ａ・Ｃ・Ｄ区）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 279 集

渡辺　一　1988 『鳩山窯跡群Ⅰ－窯跡編（１）－』鳩山窯跡群発掘調査報告書第１冊　鳩山窯跡群遺跡調査会

渡辺　一　1990 『鳩山窯跡群Ⅱ－窯跡編（２）－』鳩山窯跡群発掘調査報告書第２冊　鳩山窯跡群遺跡調査会

写真図版

1　宮前遺跡遠景（南から）

2　宮前遺跡空中写真

図版 2

1　調査区全景（北西から）

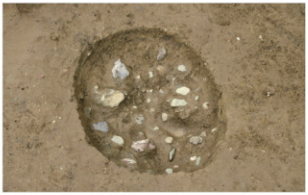
2　調査区南端（南東から）

1　第１号住居跡（南から）

2　第１号住居跡カマド（南から）

4　第１号住居跡遺物出土状況（2）（南から）

3　第１号住居跡遺物出土状況（1）（南から）



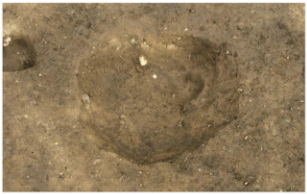
5　第１号住居跡貯蔵穴（南から）

図版 4

1　第１・２号住居跡遺物出土状況（南東から）

2　第２号住居跡遺物出土状況（北東から）

1　第 1 号土壙（東から）



2　第 3 号土壙（南から）

3　第 4・5 号土壙（南から）

4　第 6 号土壙（南から）

5　第 7 号土壙（南から）

6　第 8 号土壙（東から）

7　第 10 号土壙（東から）

8　第 11 号土壙（南西から）

図版 6

1　第 11 号土壙遺物出土状況（南から）

2　第 12 号土壙（東から）

3　第 13 号土壙（北東から）

4　第 14 号土壙（南西から）

5　第 15・16 号土壙（北東から）

6　第 15・16 号土壙遺物出土状況（北東から）

7　第 18・19 号土壙（西から）

8　第 21 号土壙（東から）

1　第１号住居跡（第８図１）

2　第１号住居跡（第８図２）

3　第１号住居跡（第８図３）

4　第１号住居跡（第８図６）

5　第１号住居跡（第８図９）

6　第１号住居跡（第８図 10）

7　第１号住居跡（第８図 11）

図版 8

1　第１号住居跡（第８図 12）

2　第１号住居跡（第８図 13）

3　第１号住居跡（第８図 17）

4　第１号住居跡（第８図 19）

5　第１号住居跡（第８図 20）

6　第１号住居跡（第８図 23）

7　第２号住居跡（第 11 図２）

1　第 2 号住居跡（第 11 図 3）

2　第 2 号住居跡（第 11 図 9）

3　第 2 号住居跡（第 11 図 10）

4　第 2 号住居跡（第 11 図 11）

5　第 2 号住居跡（第 11 図 16）

6　第 4 号土壙（第 14 図 2）

7　第 15 号土壙（第 14 図 7）

1　第２号住居跡（第 11 図 21）

2　第２号住居跡（第 11 図 22･23）

3　第１号土壙（第 14 図１）

4　第１号住居跡（第８図）

5　第１号住居跡（第８・９図）

1　第 2 号住居跡（第 11 図）

2　第 5・7・11・15・18・20 号土壙（第 14 図）

1　グリッド（第 15 図 1）

2　第 1 号住居跡カマド左袖石（第 7 図 1）

3　第 1 号住居跡カマド右袖石（第 7 図 2）

報告書抄録

ふりがな	みやまえいせき
書名	宮前遺跡
副書名	都市計画道路環状１号線／社会資本整備総合交付金（街路）工事関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第417集
編著者名	青木　弘
編集機関	公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369-0108　埼玉県熊谷市船木台４丁目４番地１　　TEL　0493-39-3955
発行年月日	西暦2015（平成27）年３月23日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
宮前遺跡（みやまえいせき）	埼玉県比企郡小川町（さいたまけんひきぐんおがわまち）青山字田中1067外（あおやまあざたなか）	11343	35-133	36°02′58″	139°14′59″	20140801～20140930	895	道路建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮前遺跡	集落跡	縄文時代	土壙　1基	縄文土器	
		奈良時代	住居跡　2軒	土師器・須恵器	
		奈良･平安時代	土壙　9基	土師器・須恵器	
		中世	土壙　4基 ピット　34基	瓦質陶器･かわらけ･古銭	
		時期不明	土壙　8基		

要約

宮前遺跡は槻川右岸の河岸段丘上に立地している。第１次となる本調査では、奈良時代の竪穴住居跡を２軒検出した。住居跡から北武蔵型坏や暗文坏といった土師器とともに、南比企産・湖西産の須恵器が出土した。本遺跡が、奈良時代には居住域となっていたことが明らかになった。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第417集

宮　前　遺　跡

都市計画道路環状１号線／社会資本整備総合交付金（街路）工事関係
埋蔵文化財発掘調査報告

平成27年３月16日　印刷
平成27年３月23日　発行

発行／公益財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108　埼玉県熊谷市船木台４丁目４番地１
電話0493(39)3955
http://www.saimaibun.or.jp

印刷／株式会社 文化新聞社